昭和42年2月24日　郵便物認可　日本交通公社特別扱承認新聞第490号
昭和44年5月8日第三種郵便物認可（毎週一回金曜日発行）

1969年7月25日　第187号

☆反帝闘争を
プロレタリア日本革命へ！
☆プロレタリア世界革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ！
共産主義者同盟

7月25日
週刊
第187号
編集発行人　佐々木和雄
一部　20円
購読料　20回500円（干共）

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2－7－6 滝沢ビル内電話代表 03（264）2961振替（東京）2610
大阪支局大阪市福島区海老江本通り1－16 北村ビル 電話06（458）6597
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町128－29（075）（701）0025
名古屋支局052（732）3553

7月28日／反戦青年委総決起集会
（明大学館5階　午後6時）
29日／ロジャーズ来日阻止闘争
（明治公園　午後6時）
30日／全国全共闘代表者会議
（中大　午後1時）

7・29ロジャーズ来日阻止——日米貿易経済合同委粉砕

今秋安保決戦への飛躍をかちとれ

安保 NATO 反革命同盟粉砕・沖縄の帝国主義的返還策動粉砕

第七回日米経済合同委員会が七月二十九日、ロジャーズ米国務長官等の参加のもとに開かれる。この日米経済合同委員会粉砕の闘いは、七〇年安保粉砕へ、今秋安保決戦へ集約されるべき闘いとして位置づけられねばならない。われわれのこの闘の一切の闘いは、七〇年安保粉砕へ、今秋安保決戦へ集約されるべき闘いとして位置づけられねばならない。この闘いに向けて、日本帝国主義の日米経済合同委員会粉砕の闘いも、かかる路線で貫徹し、一層打ち固めるものとして宣伝・煽動・組織されねばならない。この闘いに向けて、日本帝国主義の侵略・反革命・抑圧の具体的、実証的分析をまとうつつ、七〇年代に向けた日米関係の再編の動向を分析し、われわれの世界革命戦争＝プロ独樹立へ向けた闘いがいかなる質の戦略的「武装」を現在的になしとげなければならないのかを明らかにする。

東京新聞六月二〇日号は、「自主防衛を主軸とし、安保を堅持する」時代が七〇年代であると日帝アルショアシーが把握し、更に防衛庁制服組は「核装備、徴兵制非常時立法」を軸とした「安保体制解消時の自前防衛戦略」さえ練り上げていると報じた。

また、一方、ドイツでは、アンリカーイギリス-フランス各国帝国主義の執拗な「マルク切り上げ攻勢」を連合政権与党の一つ、社民党のこれへの「屈服」を粉砕して遂にはねのけたキリスト教民主・社会同盟の領袖、シュトラウスは、NATOの再編を公然と発表し、九月総選挙では、ネオ・ナチといわれる国家民主党の躍進をも食い荒して、キリスト教民主・社会同盟はどうであろうという懸念がなされている反革命同盟再編の準備が、膨張帝国主義、日帝、西独帝によって進められる一方、アメリカ帝国主義とこれら各国の経済対立は、おおうべくもない事実となりつつある。

即ち、日本アルショアシーの訪米使節団の一員は、「現在の日米関係は、昭和十二、三年頃と似ている」と感慨を語ったり、「日米経済戦争」はいまやぎりぎりの瀬戸ぎわまできていることを認識するべきである」（ウトソンI-BM社長）というような発言が、「反革命同盟、IMF・GATTの（再編）維持強化」の合意が決して崩れるものではないことを前提にしている故に、決して文字通りには受けとることはできないとしても、「責任ある」アルショアシーの口から飛びだすような時代になっているのである。

先の愛知訪米以降、日帝アルショアシーは、七〇年安保の要、沖縄の「核抜き・基地自由使用」返還構想を打ち固め、アメリカ帝国主義も、様々な利害の計算の上にたって、これに応じようとしているかにみえる。このことは、日米両帝国主義にとって、沖縄に巣ぐせようとする侵略反革命前線基地の役割は、今後とも減じるものではないことを共同利害として確認しつつも、政治的には、日帝のヘゲモニーが除々に回復されることを意味するものであるが、まさにかかる沖縄の帝国主義的再編を促進する要因は、日米の経済関係の転換の中にみてとることができるのである。

今後の日米関係は、「政治的妥協」と「経済的取り引き」、そして「共同軍事行動の強化」の複雑な関連の上に成立していくものであり、まさに、六〇年代的「常識」では把握できなくなるような関係として現実化されていく。

第七回日米貿易経済合同委員会は、従って、経済的諸問題等の「一解決」のみならず、政治的、軍事的問題の中心環である沖縄返還交渉の決定的な舞台としても用意されている。

アルショアシーナリズムで、沖縄の帝国主義的再編に占める今回の日米会議の位置が、五月愛知訪米での日本の繊維問題に伝達を受けた、アメリカ側の回答の場であり、従って、十一月佐藤訪米時での最終的「合意」への一連の交渉過程のヤマ場の一つであることが何度も伝えられている。だから、ロジャーズ国務長官を筆頭にした代表団が派遣されるのである。

最初に明らかにしたように、今秋安保決戦に占めるロジャーズ来日阻止＝日米貿易経済合同委粉砕闘争の位置はまずもってここにあることを確認しなければならない。

しかし、問題は、現在から将来にかけての日米関係総体のドラスティックな再編を見越した場合、この闘いは、「返還＝奪還派」との熾烈な党派闘争＝理論闘争の場として真剣にしない限り、主観的意図はどうであれ、著しく日帝ブルジョアジーの屍拾いとして、屈辱主義、排外主義に道を開くものとなってしまうことにある。

戦後世界を基礎づけてきた、経済的、政治的、軍事的諸関係が、まさに復興帝国主義の経済的発展を通して、米帝一元支配の崩壊として進展していることは何度も確認されてきた。又、ただ単に米帝一元支配の崩壊が帝国主義の不均等発展の結果的現象としてあるだけでなく、アジア、中南米、アフリカの後進国人民の闘いと、これに呼応するものとして開始された先進国プロレタリアートの巨大な闘いの点火によって危機の主体的克服がなされんとしているが故に、一層ブルジョアジーの危機は深まっている関係にあることも何度も確認してきた。

しかし、帝国主義の危機の進展動向の具体的分析抜きに主体的克服の方向性を具体的に設定しうるものではない。ここで集中的に問われてくる問題は、米帝一元支配図はどうであれ、著しく崩れてきた、日帝、ヨーロッパを従属せんとする西独帝の経済の問題である。

資本主義が「最高の発展段階」としての帝国主義段階に移行し、二度の帝国主義戦争を経て、プロレタリアートが世界革命に敗北した結果として、米帝一元支配が成立し、そのとで、IMF・GATT、国際反革命同盟があたかも「組織された資本主義」の制度的保障として登場したことは、自動崩壊論をとらないわれわれにとっては、歴史的必然性の発現としては把え返さねばならない。

歪曲され、隠蔽された「過渡期社会」がいかに地理的に拡大されようとも、「帝国プロレタリア人民が帝国主義を粉砕せんとする変動を発展させようとも、本質的にはそれにおかまいなしに、戦後帝国主義は相対に異常な発展をとげ、しかもその内実は、米帝一元支配を崩壊させ、新たな帝国主義的秩序を構築せんとする段階にまで至り、古典的帝国主義の運動様式をも二方で掘り崩してきた、日帝、ヨーロッパを従属せんとする西独帝の経済の問題である。

戦後世界を基礎づけてきた、経済的、政治的、軍事的諸関係が、まさに復興帝国主義の経済的発展を通して、米帝一元支配の崩壊として進展していることは何度も確認されてきた。又、ただ単に米帝一元支配の崩壊が帝国主義の不均等発展の結果的現象としてあるだけでなく、アジア、中南米、アフリカの後進国人民の闘いと、これに呼応するものとして開始された先進国プロレタリアートの巨大な闘いの点火によって危機の主体的克服がなされんとしているが故に、一層ブルジョアジーの危機は深まっている関係にあることも何度も確認してきた。

しかし、帝国主義の危機の進展動向の具体的分析抜きに主体的克服の方向性を具体的に設定しうるものではない。ここで集中的に問われてくる問題は、米帝一元支配

わが同盟の再編強化と今秋安保決戦に向けて

（下）

今秋安保決戦を世界革命戦争へ

佐藤帝国主義政府打倒の闘い

今秋安保決戦を中央権力闘争マッセンストとしてかちとれ

訪米前

共産主義者同盟政治局・中央委員会

今秋安保決戦に向けて

「革命は近い」——小ブル・ルンペンは、この言葉に随喜する。「革命は遠い」——小ブル・ルンペンは、これをもって「消耗する。」"分別ある革命家"は、この言葉をもって小ブルをおどわす。

だが、「革命は近い」に対して、「革命は遠い」と主張するならば、これほど愚劣なことはない。"いかにして革命の現実性を獲得するのか"——これこそが、問題なのだ。そのためには、まず「今秋」の政治的位置が、過去、現在から明らかにされるだけでなく、革命の未来から逆規定されなければならない。

われわれは、第一に、秋＝安保決戦であることを明らかにする。安保闘争を、七〇年六月において、とらえる常識的思考に徹底した検討が加えられ、その無規定性一般性が曝露されなければならない。

日本ブルショアジーの帝国主義政治が、八安保自動延長＝沖縄導還＝日米共同侵略前進基地化を通しての安保強化・アジア核安保確立として推進されているとき、「十一月佐藤訪米＝「沖縄解決」は、まさしく、安保政防の決定的焦点である。自動延長目の八七〇年六月決戦への意識性が、完璧なく暴露され、佐藤訪米＝安保決戦論が確立されなければならない。

第二に、われわれは、安保決戦を、訪米の十一月ではなく、十月として提起する。闘いは、羽田への動員としてではなく、その前段の十月における政治危機の創出をめざして敢行されなければならない。

「佐藤帝国主義政府打倒」こそが、安保決戦の内実である。

第三に、われわれは安保決戦における闘争形態が、従来の闘争の単なる左翼的延長線上に措定されることのできないものであることを提起する。それは、質的、主体的、二重の意味において、提起されている。

それは、一つには、敵階級の「反革命」に対する「革命」の問題である。四・二八とそれ以降の教訓は、反革命が質的に強化され、従来の闘争をもってしては、安保闘争を闘争たらしめることも不可能に近くされていること、それ故、"質的飛躍をぬきにした単なる量的拡大ではなく、10・8の飛躍、東大闘争における飛躍を更に上まわる闘争の質的飛躍——このことをぬきにしては、闘争の前進はありえない。まことに、質的飛躍の問題は、「革命」の発展が対極にうみだす「反革命」によって、即ち「革命戦争」…——この衰紅の旗を鮮明にする。

しかし、二つにはわれわれは、闘争の質的飛躍の問題を、「反革命」のそれとしてではなく、革命の現実性を獲得する闘争として、即ち、革命の闘争として、革命的闘争を、単なる防衛闘争ではなく、革命的闘争として、即ち、革命の現実性を獲得する闘争として、即ち、革命の闘争として、革命的闘争を、単なる防衛闘争ではなく、革命的

破砕

り崩してきた、日帝、を征覇せんとする西独、問題である。

か「最高の発展段階」国主義段階に移行し、主義戦争を経て、プロが世界革命に敗北して、米帝一元支配が成立とともに、IMF・GA及革命同盟があたかも「資本主義」の制度的変質したことは、自動らないわれわれにとって必然性の発現としてねばならない。

陳外された「過渡期」に地理的に拡大され革命プロレタリア人を驀進せんとする運ようとも、本質的に変いないに、戦後帝国主義の異常な発展をとげの内実は、米帝一元支して、新たな帝国主義的せんとする段階にまで帝国主義の運動様式

さえぢちつかせ始めているのが帝国主義の現段階であり、その具体的態様は、最初に触れたようなものとしてあるのである。

勿論、われわれは、米帝一元支配にかわる、新たな帝国主義的秩序の確立を、自動的に必然的に考えない。何故ならば、それが可能であるとするのは、米帝一元支配が永続するとゝもそるのと同じように、プルジョアイデオロギーであり、革命の否定に連るからである。

しかし、また、同時に、帝国主義を「現実的政策」の総体としても決して把えない。あくまでも、各国帝国主義は、相互の競争―対立関係の中に「調和をされえて」かく成立しえず、各国帝国主義の「共同利害」は「世界」革命への予防的反革命」以外にはありえないし、他の競合する帝国主義を圧倒落とすためには、プロレタリア運動さえ利用するものであったことを忘れてはならない。

われわれは、今、大戦間の日米関係、独米関係等の推移の厳密な総括の上にについて、現在のそれを把え返さねばならない。

たとえば、27年金融恐慌の前年の対米輸出は総額の48・5%を占めていた、原材料資源も大幅にアメリカに依存し、金融的にもそうであったことから、一切の政治的崩壊を導いた場合、日米関帝国主義戦争は、「容々倭々」ないしは、「当時の日本ブルジョアジーは理性的でなかった」としてブルジョアジーと同じ総括に落ち込む過誤、乃至は世界共通のものの欠如―革命的情勢に接近し、世界の矛盾と未遂成部分、後の隘路と未遂成部分についてとらえ、労働者国独占国家の決定的過渡の階級闘争による止場階級闘争の統合による全ブロック階級闘争の革命的解体化撹乱を通じて新たな帝国主義戦争の準備と三段階、戦争に転化する古典性をもつものとして存在する。

だが、「帝国主義論」を軸として展開されるこの危機が現代世界における危機としての危機である所以は、それがまさしく、現代帝国主義の危機に対する予防的先行性、危機へのなしくずし的解消対応としての積極性によって恐慌、戦争の前段階における階級攻防を行り出さずにはおかないことにある。すなわち、前段階における帝国主義政治の予防的先行性と階級攻防、階級関係の不断の緊張と階級危機の恒常性を通じての拡大化として、現代世界のさしあたっての危機の特有性把握がされなければならない。

恐慌・戦争の古典的危機に至る経済に対する措置と服従の一層のものの欠如―革命的情勢に接近し、世界の矛盾と未遂成部分、後の隘路と未遂成部分についてとらえ、労働者国独占国家の決定的過渡の階級闘争による止場階級闘争の統合による全ブロック階級闘争の革命的解体化撹乱を通じて新たな帝国主義戦争の準備と三段階、戦争に転化する古典性をもつものとして存在する。

だが、「帝国主義論」を軸として展開されるこの危機が現代世界における危機としての危機である所以は、それがまさしく、現代帝国主義の危機に対する予防的先行性、危機へのなしくずし的解消対応としての積極性によって恐慌、戦争の前段階における階級攻防を行り出さずにはおかないことにある。すなわち、前段階における帝国主義政治の予防的先行性と階級攻防、階級関係の不断の緊張と階級危機の恒常性を通じての拡大化として、現代世界のさしあたっての危機の特有性把握がされなければならない。

恐慌・戦争の古典的危機に至る

の闘い
ちとれ
政治局・書記局

級闘争を、世界 階級闘争の単一的発展へとの世界単一党建設

陥危機の的止揚を

同大会および以ロック階級闘争の革化の条件とその形態それは「現代過渡期危機の性格と形態」された。

世界の規定的契機は不均衡発展である。不均等発展である。の激化、なしくずしなしくずし統制経済る帝国主義の後進国

経済に対する措置と服従の一層のものの欠如―革命的情勢に接近し、世界の矛盾と未遂成部分、後の隘路と未遂成部分についてとらえ、労働者国独占国家の決定的過渡の階級闘争による止場階級闘争の統合による全ブロック階級闘争の革命的解体化撹乱を通じて新たな帝国主義戦争の準備と三段階、戦争に転化する古典性をもつものとして存在する。

だが、「帝国主義論」を軸として展開されるこの危機が現代世界における危機としての危機である所以は、それがまさしく、現代帝国主義の危機に対する予防的先行性、危機へのなしくずし的解消対応としての積極性によって恐慌、戦争の前段階における階級攻防を行り出さずにはおかないことにある。すなわち、前段階における帝国主義政治の予防的先行性と階級攻防、階級関係の不断の緊張と階級危機の恒常性を通じての拡大化として、現代世界のさしあたっての危機の特有性把握がされなければならない。

恐慌・戦争の古典的危機に至る

7・20
一万三千名が日比谷に結集
今秋安保決戦へ向けて意志統一

七月二〇日、午後一時より、日比谷野音で「騒乱罪・暴動鎮圧法粉砕、東大分離裁判粉砕、統一公判要求」労農学市民大集会が一万三千名を結集して圧倒的に行われた。

日本帝国主義の不可避な優位の用粉砕、反革命の強化は、六七年10・8羽田闘争―神田カルチェ・ラタン闘争、4・28安保・沖縄闘争と連続し、かつより鋭角的な闘いとして発展してきたこれらの闘いは、まさに革命的左翼によって闘いが領導されてきたが故に全て、「安保粉砕・日帝打倒―プロ独樹立」に統合され、かかる運動の猛発目標との関連で、社共人民戦線派、とりわけ日共民青との熾烈な党派闘争を通してからこそ初めてきたのである。

一方、日本帝国主義者は日米―アジア関係の再編が日本帝国主義の異常な膨張面への転化によって不可避であることを見抜き、かつ、それが増々プロレタリア人民の全アジア的規模での日帝との闘いに発展するものであることを見抜き、日本帝国主義の死活をかけた、権力政体のなしくずしファシズム的それへの転換をもって七〇年代への突破口を切り開かんとし、革命的左翼と大衆との分断、日本人民とアジア人民との分断、既成労組運動の解体等々を目論む攻撃を一斉に強化したのである。

七・二〇集会は、以上の情勢の基本的動向をふまえ、今秋佐藤訪米阻止に集つまる安保決戦に対して、いかなる闘いを準備しなければならないのかを、この間の戦線の拡大の意義をふまえて意志統一する場として基本的に設定された。羽仁五郎氏の講演、弁護団からのあいさつを受けて、社学同を代表して福田君は、以上のような内容で本集会を革命的に牽引した赤ヘルメットの学生は、明大全共闘、中大全帝闘をはじめ各大学全共闘の隊列を担って終始、集会一デモを闘い抜いた。

午後四時半過ぎ、デモに出発し、地裁を包囲し、虎の門―新橋のコースを廻って国労会館前、東京駅で解散集会をかちとった。

なお、革マル派自名は、会場から放逐された。

お詫び

本紙前号「獄中からの通信」の掲載は、一部誤解を招くおそれがあるものでした。読者諸兄姉にお詫びします。

編集局

7・28反戦総決起集会に結集せよ

佐藤帝国主義閣僚は「安保自動延長」「沖縄の本土並返還」をもって安保この切り[redacted]ている。

しかしながら六月ASPAC[redacted]における[redacted]性が[redacted]見事に暴露された[redacted]ス問題[redacted]の性格をあらわにして[redacted]ロジャーズ来日から経済合同委―変動米―佐藤訪米によって一気に安保をのり切ろうという構想をすでに明らかにした。

現在反戦青年委員会の活動は組織的、運動論的にさらに飛躍的な質への飛躍がせまられている。十・八以降

金帯の反戦青年委員会に結集する労働者学生諸君!!

七・七年闘争の前夜祭的闘いとして戦われた六・一五闘争は、日帝打倒の闘いの第一歩であり、六・一五闘争を突破口を切り拓き、安保粉砕、日帝打倒の闘いの第二・二八闘争をもって戦略力との激しい攻防戦を開始した。

現在反戦青年委員会に結集されていることは四・二八闘争から六・一五闘争を我々がいかに総括し、10・11月の安保決戦に向けて我々が何をどう具体的に準備するかという点である。

特にこの闘争の騒乱罪―破防法と打ち破る階級攻撃下にあって我々の戦列を強化し、物質力をいかに高めうるかという作業は、この安保決戦を闘争に転化しなければならない。

第187号　第三種郵便物認可（毎週一回金曜日発行）　戦旗　昭和44年7月25日　(2)

10月マッセンストへ反戦派進撃

全電通大会、赤ヘル反戦が民同の枠を打ち破る

共産主義者同盟電通委員会

(1)

七月八日から京都で開催された全電通第二十二回の定期大会のただ一つの焦点は、今秋を最大の決戦期とする安保闘争への方針であった。大会で電通民同の大ボス、小ボス連によって多く語られた青年問題、反戦青年委の取扱い、さらには長期闘争方針にかこつけての「七〇年闘争」なる先苦も、すべてただ一つの回答――佐藤訪米阻止闘争へなだれこめるかどうか、の回答に集約されざるを得ない、かかる位置に置かれた大会だったといえよう。

二千名にも及ぶ傍聴者――多くの組合員から公社の労務、官憲までも入っていた――もまた、この一点に関心を耳をたてていた。

電通民同 主流の対応 といえば方針起草から下部討議指導まで一貫して右翼方針で自己を貫いており、さらに大会前日の記者会見で中央本部書記長が「安保反対のストライキなどできないし、やらない」と断ることなく明言していたこの発言をめぐって一般組合員はもちろん、民同の大ボス、小ボスの関心までもが、大会での安保論議に集中されるといった情況であった。

そして、組合員から公社労組、官憲に至るまでの電通大会安保論議に注がれた目は、次には、安保闘争の真の焦点が、大会における民同の見良なしゃべりにあるのではなく、六七年一〇・八以降階級闘争の新たな政治的担い手として登場した反戦派労働者の断乎たる行動にこそあることを、思い知らされたのである。大会初日、大阪を中心とした赤ヘルメットの電通内反戦部隊が、全国の反戦派労働者の余望を担って、デモで会場に到着した時から、いっさいの目は一五〇の赤ヘル部隊に集中された。電通民同がヘルメット部隊の入場を阻止しようとしたが、電通組合員が自らの大会を傍聴する正当な権利を否定しようもなく、かくて会場の最大焦点は「反戦」の赤旗がなびき、赤ヘルメットが埋めるところとなった。

電通民同が、組合員である反戦青年委メンバーに対してとった対応の第一は、かかる傍聴阻止の陰謀であり、第二は、官憲と代々木の差別と対立して地元当局者で反戦・全学連・全共闘に敵対している知事三川にあいさつ（いったいだれに向っての何のあいさつなのか）をさせるということだった。当然のことながら、三川のあいさつ（またしても彼は、反戦派への愚劣きわまりない罵詈を行なおうとした）は、赤ヘル部隊と他の傍聴者の強烈なヤジで粉砕され、あわてた民同は休会を宣言して、代議員傍聴者全員の退場を宣言するという"慣例"の繰開きとなったのである。

だがこのような大会の経過自体は、後の大会過程での民同大ボス小ボス連による安保についてのおしゃべりと同様、われわれの重きをおくところではない。問題はただ、次のこと――佐藤訪米に煮つまろう安保決戦期に、労働組合が全体としていかなる方針を語るとしても（現実には口先だけのものとなろうが）、かかる組合主義の枠を打ち破る行動にそなえることを、思い知らされたのである。大会初日、大阪を中心とした赤ヘルメットの電通内反戦部隊が、全国の反戦派労働者の余望を担って、デモで会場に到着した時から、いっさいの目は一五〇の赤ヘル部隊に集中された。電通民同がヘルメット部隊の入場を阻止しようとしたが、電通組合員が自らの大会を傍聴する正当な権利を否定しようもなく、かくて会場の最大焦点は「反戦」の赤旗がなびき、赤ヘルメットが埋めるところとなった。

電通民同が、組合員である反戦青年委メンバーに対してとった対応の第一は、かかる傍聴阻止の陰謀であり、第二は、官憲と代々木の差別と対立して地元当局者で反戦・全学連・全共闘に敵対している知事三川にあいさつ（いったいだれに向っての何のあいさつなのか）をさせるということだった。当然のことながら、三川のあいさつ（またしても彼は、反戦派への愚劣きわまりない罵詈を行なおうとした）は、赤ヘル部隊と他の傍聴者の強烈なヤジで粉砕され、あわてた民同は休会を宣言して、代議員傍聴者全員の退場を宣言するという"慣例"の繰開きとなったのである。

だがこのような大会の経過自体は、後の大会過程での民同大ボス小ボス連による安保についてのおしゃべりと同様、われわれの重きをおくところではない。問題はただ、次のこと――佐藤訪米に煮つまろう安保決戦期に、労働組合が全体としていかなる方針を語るとしても（現実には口先だけのものとなろうが）、かかる組合主義の枠を打ち破る行動にそなえることを、思い知らされたのである。

(2)

したがって、われわれの全電通全国大会への立場と方針は当初から、労働組合の方針一般の左傾化を語り、それに自らを委ねるといったものではありえなかった（電通内に存在するいくつかの「反戦派」には、かかる志向がなお存在していたが……）それ故、われわれの主体的努力は、電通内の反戦派活動家を今秋の中央権力闘争＝マッセンストの勝利的貫徹へと組織し、その討論を責任ある党派としてリードすることによって、ある程度の結実をとげつつあることによって全国的にもだれているのである。

だが、かかる生産点を貫く帝国主義的再編に真向つから対決する闘いが、労働戦線に顕現されて登場した。今次春闘における労資の攻防の基軸はまさにこの点にあったし、それ故公社は、スト拠点のみならず大衆行動の高揚した職場への官憲導入をも含み、反戦派パージにその政策を移してきた。とくにかかる労資攻防が最も激烈な近畿では、制私服を問わず、官憲の局内立入りは常態化しつつある。あらゆる職場集会に至るまで官憲が直接情報収集活動を行なっており、地域の階級的労働運動に対する弾圧は、不当な逮捕の続出となって現われている。

にもかかわらず、組合主義的団結をこえて展開される反レバ闘争（注記においては浜寺―山科―大阪中郵へと連続している）は、新しい大衆的高揚をみせており、春闘におけるヤマネコ的職場闘争はかかる既存の組合主義的枠をこえた闘いへと再組織されつつある。

われわれはいま、阿孚反戦の隊伍を固めることにより、かかる闘争の大衆的高揚を政治的に煽め、秋のマッセンストの現実的要素へと組み入れなければならない。かかるものとして、全国的な反レバ戦線を領導しなければならない。さらに、秋の中央権力闘争＝マッセンストからその後のソビエト革命の展望を具体化するための「全国労働者評議会運動」を準備しなければならない。

先進的な電通活動家にとってはもはや公社当局者との闘いがその中心軸ではなく――一連の職場闘争をすでに恒常的な国家権力の介入、弾圧を受けているのだ――権力闘争が現実的課題であることを知っており、労働組合運動一般が問題なのではなくソビエト運動の開始が、階級闘争の現実的課題となっている情勢を見通しているわが同盟は、今秋の中央権力闘争＝マッセンストの勝利的実現を通して階級闘争のかかる地平を切開くべく資格ある党派として、かかる運動集会には、電通産別におけるその任務を果すべき準備にとりかかっていることを、ここに報告しておきたい。

反戦派集会を中心的に準備したわれわれは、その中で、いまだ明確な政治方針をもちえない今秋の安保決戦期を前に鋭意しつづけている護反戦グループに対し、中央権力闘争＝マッセンストの勝利的貫徹の方針を（現にわれわれが主体的に準備している計画を）提起した。職場闘争のみが政治闘争を展開できるのだ――一般的な生産点における反戦闘争を」と一般的に叫ぶ部分は、逆に秋の政治局面の切り開きが中央権力闘争（さまざまに衝突闘争一般ではない）と結合したマッセンスト方針以外にはないことに客観的に同意せざるをえなくなっている。無内容で幻想的な「労働者権力論」を克服しようとしていた部分は、彼らにあっては夢想にすぎないソビエト運動の地平が中央権力闘争＝マッセンストによって切開かれるものであることを知って、われわれの方針に反論の余地がないことを悟りつつあるだが論争の場で、彼らを論破することのみが、電通内で最も先進的な闘争を展開してきた、それによって護反戦グループ、護反戦活動家を深刻にきたえ抜いてきたが同盟―電通労研―電通反戦の任務ではない。彼らをも吸引して、革命的党派の建設をこそ、軍事的力量をもって闘い抜かれるべき中央権力闘争へと組織することである。

(3)

電通労働運動の今日の情況は、われわれが正当にも交通運輸通信の帝国主義的再編と規定づけた合理化攻撃（国鉄五万人＋十五万人合理化、今通DPS導入↓公社化、郵政六万人合理化と今く軌を一にした電通第四次合理化）が進行する中で、民間的組合主義路線の崩壊とその経営協調会化が急ピッチで進行している。民間運動の崩壊は停止するも、公社自体がその労務支配体制を、かつての合理化闘争の労務的産物である労働協約によって、その枠内に組合を押えこめる（＝丸抱え）から、かかる労務支配体制を自ら解体、再編して新たに勝場専制体制へと換骨奪胎することによって全国的にもだれているのである。

電通労働運動の今日の情況は、われわれが正当にも交通運輸通信の帝国主義的再編と規定づけた合理化攻撃（国鉄五万人＋十五万人合理化、今通DPS導入↓公社化、郵政六万人合理化と今く軌を一にした電通第四次合理化）が進行する中で、民間的組合主義路線の崩壊とその経営協調会化が急ピッチで進行している。民間運動の崩壊は停止するも、公社自体がその労務支配体制を、かつての合理化闘争の労務的産物である労働協約によって、その枠内に組合を押えこめる（＝丸抱え）から、かかる労務支配体制を自ら解体、再編して新たに勝場専制体制へと換骨奪胎することによって全国的にもだれているのである。

だが、かかる生産点を貫く帝国主義的再編に真向つから対決する闘いが、労働戦線に顕現されて登場した。今次春闘における労資の攻防の基軸はまさにこの点にあったし、それ故公社は、スト拠点のみならず大衆行動の高揚した職場への官憲導入をも含み、反戦派パージにその政策を移してきた。とくにかかる労資攻防が最も激烈な近畿では、制私服を問わず、官憲の局内立入りは常態化しつつある。あらゆる職場集会に至るまで官憲が直接情報収集活動を行なっており、地域の階級的労働運動に対する弾圧は、不当な逮捕の続出となって現われている。

にもかかわらず、組合主義的団結をこえて展開される反レバ闘争（注記においては浜寺―山科―大阪中郵へと連続している）は、新しい大衆的高揚をみせており、春闘におけるヤマネコ的職場闘争はかかる既存の組合主義的枠をこえた闘いへと再組織されつつある。

われわれはいま、阿孚反戦の隊伍を固めることにより、かかる闘争の大衆的高揚を政治的に煽め、秋のマッセンストの現実的要素へと組み入れなければならない。かかるものとして、全国的な反レバ戦線を領導しなければならない。さらに、秋の中央権力闘争＝マッセンストからその後のソビエト革命の展望を具体化するための「全国労働者評議会運動」を準備しなければならない。

先進的な電通活動家にとってはもはや公社当局者との闘いがその中心軸ではなく――一連の職場闘争をすでに恒常的な国家権力の介入、弾圧を受けているのだ――権力闘争が現実的課題であることを知っており、労働組合運動一般が問題なのではなくソビエト運動の開始が、階級闘争の現実的課題となっている情勢を見通しているわが同盟は、今秋の中央権力闘争＝マッセンストの勝利的実現を通して階級闘争のかかる地平を切開くべく資格ある党派として、かかる運動集会には、電通産別におけるその任務を果すべき準備にとりかかっていることを、ここに報告しておきたい。

獄中から

小菅刑務所在監　滝田吉光（茨城大学）

おれの決意は堅い、この堅さは剛直なそれではない。「ヘビのようにさとく鳩のように素直であれ」という根源的な根拠をもった堅さだ。おれの決意は、この6月、7月の闘いにおいて、おれの身辺をとりまく状況が急速に変化していることに基づいている。この6月、7月にわたって、機動隊、刑事、検察、裁判官それぞれ、ありとあらゆる支配権力機構機構の人間達が、その権力の及ぶ範囲、プルジョア的性をフルに行使することによって、自ら暴露してきたことによって、その乗らさ、言い換えれば、どんな姿勢、どんな姿勢、同盟にも属さない根源的な権力機構が反動勢力としてのその役割を果たしたおれがどんな些細な「こ」れに対する」幻想をもつことも許さなかったから、幻想は打ち破られた。それゆえ、もはやおれはどんな弾圧にも屈することはないだろう。それどころか、その弾圧に胎する反撃を不断に意しているその意味においてもはや、裁判という個別分散的な反権力闘争の戦術的撹乱を全面支持すると共に「戦闘中立」の神話を、大衆的暴露をへく（東大闘争において東大神話をうちくだいたように）また、粉砕すべく断乎として非協力的な戦いの一翼を担いきる決意二〇日現在獄舎同盟学に呼応し、

イタリア階級情勢の現段階（上）

先駆的学園――工場占拠を

NATO粉砕への全欧的結合へ

共産主義者同盟国際部

世界同時革命をきりひらくために（6）

アメリカ

BPPの領導で党形成めざし

革命的左派三千五百で大会かちとる

去る七月十八、十九、二十二、二十四日の四日間にわたり、米国オークランドで開かれた、反ファシズム統一戦線の大会には、三千五百名の米国新左翼が集まり、米国で始めてともいえる反帝、反ファシスト闘争に関する内実の供ったディスカッションがなされた。この大会は、ブラックパンサー党の呼びかけに呼応して、SDSを始めとする戦闘的新左翼が、今までの闘いの組織的弱体と、階級的位置づけの不足を止揚して、新たなる強固な闘いに向けて、マルクス＝レーニン主義労働者階級党の形成を目ざして第一歩を踏み出したものと見ることができる。

昨年東京で行われた八月国際反戦会議にSDSを代表して出席していたケン・クローク氏は、「帰ってきてから、SDSの内部で、ブラックパンサー党の闘いを支持するかどうかで、激しい論争があった。SDSの中の多くの人々は、ブラックパンサー党の闘いを、ブルジョア民族主義の闘いとしか見ていなかった。しかし、ブラックパンサー党の闘いは、ブルジョア民族主義の闘いではなく、プロレタリア国際主義の闘いであることを理解するようになった。」と語っていた。

この大会が現在の米国階級闘争において、大きな飛躍を意味するものとなろうと語っていた。

わが同盟国際部は、この大会に次のようなメッセージを送った。

「我々共産主義者同盟は、日本の戦闘的革命的労働者、学生を代表して、固い連帯を表明する。今日、現代帝国主義は、全世界においてそのファッショ的性格を露骨にしてきている。我々は帝国主義イタリアの戦後階級社会の矛盾しあう経済政策路線が「自由」に従属的であれ明白に左派政権の崩壊へと、イタリアは激しい、南部は北部の半分という所得の格差がある。56―67年の米資本の投下を例にとってみれば八百五十六億ドルの半分以上は、ミラノ、トリノ、ジェノバを結ぶ北部三角工業地帯（人口二千三百万）に集中し、南部の大半は、生産性の低い農業地帯に留っている。

文盲率にしても、北部は一・九%、南は十六・三%の比較であり下層労働者として北部へ集中し、部市の社会各層の増大と南部の過疎問題を引き起している。

六七年十一月中旬、イタリアの全労働者二千万人の半分以上がゼネストに参加した。それは、年金切り下げを止めることができるという「的闘争」組織性」と同時に、それが大衆的暴動にまで発展したイタリアの階級闘争の昂揚であった。

この闘争が示していることは、CGIL（労働総同盟、三八〇万）、CISL（労働組合連盟、二三〇万）、UIL（労働組合同盟、一〇〇万）の三大労組のスト指令を表明してさえいる。ここにおいて外化しているイタリア国内の矛盾しあう経済政策路線であるこの国家の計画・統制権が「私的経済活動の自由」に従属的であれ明白に左派政権の崩壊へと、イタリアは激しい、南部は北部の半分という所得の格差がある。56―67年の米資本の投下を例にとってみれば八百五十六億ドルの半分以上とは

獄中からの通信

生的ゼネストした学生運動

滝田吉光
（茨城大学）

意は盛い。この堅さは一ではない。"へどのよ"と、折原氏が述べ柔らかな堅い決ことだ。この6ケ月間機動隊、刑事、検事、ありとあらゆる国内の人間逸が、その機時、プルジョア的性格組織にまで自ら暴露しによって、その巻らかれば、どんな姿践、しない根源的な海のよ十をこの堅さは獲得つのは、これら国家権関教師としての役割れがどんな些細な「こ」幻想をもつことさなかったから、幻想れた。それゆえ、もはどんな弾圧にも屈するろう。それどころか倍する反撃を不断に用にも躊躇においても衝撃から、裁判といにおける反権力闘争へを全面支持すると共に一の神話を、大衆的に（東大闘争において「うちくだいたように）すべく闘呼とし非妥の一翼を担いきる決意識的闘争に呼応し八レッシャーとして利用しかなかった、と指摘。

学生運動の歴史的役割

ソは学生運動の活発もった国ではない。市固定化し、また、戦後「学園に政治をもち込ファシスト時代のそきつづけていた。共産ら、学内党組織を学まかえることはできの六七―六八学年度は大学と同じ闘争の波に全国のほとんどの大学ができぬ状況をつくりだしらこのその反対運動度統に入ると「スチュデント・パワー」の運動に転化の契機は、トリノ大学移転計画にたいする反対運動だった。トリノ大学はすでに文学部を中心として、長期ストの経験をもち、結成された共闘会議は、学生運動をこれまでのように抗議や要求の運動ではなく、学生自身の内部形成をめざす運動に組織する可能性を追求し、同時に運動のあり方について検討をおこなった。現在の大学制度とそこでの教育体系全体に対して異議を申立て、大学の権威主義を否定することが結論であった。この過程で、学内党組織を学具体的活動内容として対抗講座のプランが提出された。正教授の絶対的支配権のある講座制に対して「反大学」の位置づけをもって提起されたのである。

これが契機となり、新しい運動形態について検討が加えられる。既成の運動組織に指導をゆだねるを拒否し、常に全員参加の集会が基礎となり、決定機関となることとなった。これが第二の特徴である。既成の組織の否定の思想が議会制民主主義の否定＝直接民主主義の要求として発展した。対抗講座のテーマも「心理分析と社会抑圧」「九六〇年以降のイタリヤ資本主義の発展」「ベトナム」「ラテン・アメリカ」等々と伝統的講座では扱われなかったテーマである。六八年一月末から国立大学三十二校のうち二十八校が占拠に入り、共通の特徴である学生権力樹立状態をつくりだしていった。

PCI指導を拒否し

少数派左翼の登場

一九六一年、トリノ市に「クアデルニ・ロッシ」がフィアット工場の労働運動の激発を背景に生れた。共産党とその指導下の労働組合と政党、組合組織の分裂がはっきりしたかたちで現われてきた。この時、「新」資本主義時代に対応する新しい組織運動の確立をめざし、このグループが結成された。労働運動に活動の基盤を求めたのにたいし、左翼思想の革新をめざす文化運動を中心にグループが結成されたのもの。一九六二年に「クアデルニ・ピアチェティーニ」はマルクス主義をめぐる哲学的思想論争を掲載するかたわら、世界の情勢、ブラック・パワー・ベトナム、ラテン・アメリカ、文化革命、ドイツSDSなどの情報を系統的に提供してきた。この二誌がトリノ大学闘争の理論的指導を行なってきた、と言ってよい。

その他、各都市にこの組織の機関誌を定期的に発刊し、地域性を先行的に獲得する方向性をとりつつある労働闘争がイタリア第二期学園闘争の過程で実践的問題として登場してきた以下次回で、それらの戦略的資料をもとに第二回国際反帝会議の獲得視点から、それらを総括していきたい。

7・20東大統一公判獲得

包囲闘争への連帯表明

―獄内外の闘いを推進しよう―

京裁
東地

小菅刑務所在監 高橋憲三（明治大学）

同志諸君へ

「分割公判粉砕・統一公判要求」の檄文を受けたので"肉体派"としてはいささか羞恥心を抱きながらも筆を取りました。

一・一九からはや六カ月が過ぎました。単純まわりない日々の生活がそうさせるのか、半年の月日の流れにわれながら唖然とし遥かなる一つの時代の終焉をも感じます。

獄中で今なお熾烈な闘いを続けている（？）私に獄外部から「決意表明」の檄文を送ってくれた友人諸君よ！

大学立法粉砕！全国学園闘争を更に深化せよ！全国全共闘結成へバク進せよ！

11月佐藤訪米阻止！

安保粉砕、沖縄闘争勝利！

小菅刑務所在監 伊藤貢（東北学院大学）

前略

獄中で今なお熾烈な闘いを続けている（？）私に獄外部から「決意表明」の檄文を送ってくれた友人諸君へ

日帝の死活をかけた、対外膨張国内における帝国主義的再編を絶対粉砕することなく、なし崩しファシズム＝予防反革命を粉砕し、プロレタリアートの造にファシズムかプロ独かという闘いから、ファシズムを消し去り、階級闘争に決着をつけようとではないか。

我々獄中部隊は、七・二〇日比谷公会堂前における〝佐藤訪米粉砕、統一公判要求、大決起集会に向け、十八日よりハンストで連帯することを決意する。

反帝統一戦線の旗の下
安保粉砕！沖縄闘争勝利！大学立法粉砕！入管法粉砕！分離公判粉砕！統一公判貫徹！日帝打倒！世界一国同時革命万才！

小菅刑務所在監 杉浦謙治（立教大学）

前略

お手紙拝見致しました。裁判闘争に向けての決意書を書いてくれたことでしたが、その件と合わせて裁判闘争に関しての疑問などを書き述べてみたいと思います。

我々が一・一九に遂行されてから、早、半年、むろん、そのような長期勾留に法的根拠などあるはずはないのですが、依然として我々は勾留されており、尚、彩の間釈放される見込とも立たない。

我々は当初から統一公判を要求しており、一貫して地裁側の分割公判に反対してきました。而してその結果として、去る五月二十七日から、地裁側の強圧的な分割公判が開始されただけです。我々勾留被告人は、この地裁の態度に対し、出廷拒否戦術等で闘ってきましたが、はじめのうちはそれも効果があったとはいえ、今では次々と欠席裁判が強行されている。

小菅刑務所在監 高橋憲三（明治大学）

同志諸君へ

「分割公判粉砕・統一公判要求」の檄文を受けたので"肉体派"としてはいささか羞恥心を抱きながらも筆を取りました。

一・一九からはや六カ月が過ぎました。単純まわりない日々の生活がそうさせるのか、半年の月日の流れにわれながら唖然とし遥かなる一つの時代の終焉をも感じます。

獄中で今なお熾烈な闘いを続けている（？）私に獄外部から「決意表明」の檄文を送ってくれた友人諸君よ！

大学立法粉砕！全国学園闘争を更に深化せよ！全国全共闘結成へバク進せよ！

11月佐藤訪米阻止！

安保粉砕、沖縄闘争勝利！

東京拘置所在監 小畑利滋（東北学院大学）

全国の労働者、農民、市民、学生諸君へ

雪深き東北の地より遠隔され早や半年になろうとしています。

七〇年代階級闘争の先陣、安田解放講堂つぶれた革命戦士の誇りだけは失いたくない一心で、いかなる弾圧をも粉砕する強固な意志は、多分全闘士らも堅くなったでしょう。しかし、革命が現実のものとなりつつあると感知した権力は、狂気した反革命を開始しました。共産同、革共同への破防法適用は、そのことを如実に表わしています。また東大闘争への分離公判、欠席裁判は、権力の実体を広範な人民の前にファシズムとしてあらわにさらけ出すところとなっています。

闘う同志諸君！戦線の前進は、一つ一つの闘争とその中で巨大なうごとなり、六・一五安保粉砕、日帝打倒、沖縄闘争勝利六政治集会へという大波となっています。六九年初頭の東大―神田カルチェラタン闘争、四月沖縄闘争、六月アスパック闘争と休む間もない、権力との激しい攻防より高次の大衆的大結集を獲得したことは、七〇年安保決戦への前進を示していま す。その道程は、革命のふみいこんクリートの壁をぶち破り伝って来ました。

差しかられる〝戦旗〟の一字一字を追いつつ闘う意気を昂揚させました。獄外に巨大な戦列があるほど、我々の気持ちをひきしめるものはありません。しかし我々は単純に大衆結集に、無自覚なまま拝跪するわけにはいかない。共産同、共労、社学同が先頭になり切迫した闘争が生んだ、大衆の自然発生的の新たな政治性を認めつつも、それに甘まず一〇・二一闘争、佐藤訪米阻止闘争を、中央権力闘争として連続して闘う部隊創設へ向けた形で、組織活動を荷なってこそ、真に自らをボリシェヴィキたらしめることに歩ませることが出来るのだ。またすでに始まっている権力の新たな崩しファシズムの攻撃＝予防反革命を分析し、いかに粉砕していくのかを充分把握し、自からを理論的に強化して鍛えなければならない。反革命の嵐の中で、敵権力の分離公判粉砕の攻撃、司法権力の幻想性、闘争隊形を出征兵、ハンストでもって粉砕しつつ、プロレタリアートの世界革命への全面登場をつながずであろう。

我々の組織された実力をもってプロレタリアートの権力闘争への全面登場を実現するため、今こそ共産同を革命党へ鍛えよう。我々は中央権力闘争と地域闘争とのトライキを連続させ、日帝打倒、プロレタリア世界一国同時革命への第一歩とすることを決意しようかかる獄外において熾烈に闘われなければならない闘争と、我々獄内にいる者は堅く連帯しつつ、ブルジョア国家権力の人民弾圧分業体制に組み込まれている地域の分離欠席公判を粉砕するため、新たな決意のもと統一公判に向かって立ちとるであろう。すでに権力の行政執行権力の強化、上からのなし崩しファシズムとしてある大衆蜂起、長期拘留、暗黒裁判（分離、欠席公判）の攻撃を、司法権力の幻想性、闘争隊形を出征兵、ハンストでもって粉砕しつつ、プロレタリアートの世界革命への全面登場をつながずであろう。

手にして権力を握撃する事を得せしめるような訓練と気風と組織であるべへと高めるべく日々ブルジョアイデオロギー感覚運動を続けています。

〝情報戦線社会〟である獄中ではが外の様子はほとんど解らないのですが破防法の発動下り一そうの警戒心と緊張感をもって熾烈な階級闘争を闘いぬいてください。

七月二十日には統一公判勝利労農市民連帯集会が開かれるとの事候もあくまで原則的な、闘いの姿勢を崩さず統一公判勝利に向けて闘いぬく事を〝革命家の卵〟のささやかな決意として献呈します。

統一公判勝利！全国学園闘争勝利！安保粉砕、日帝打倒

小菅刑務所在監 鈴木敬（早稲田大学）

分離裁判＝階級裁判粉砕！
統一裁判を獲ち取るぞ！
司法のファッショ化弾劾！
7・20現地闘争集会と連帯して闘うぞ！

ハンガーストライキで闘うぞ！

―闘う同志諸君に熱い連帯のあいさつを、監獄の壁をぶち破るほどの人ことばを―

安保粉砕・日帝打倒！

七月十七日 小菅にて

小菅刑務所在監 森清高（京都大学）

手紙受取りました。〝アッピール〟を送り7・20の闘争に連帯したいと思います。

手元に第4回公判期日召喚状が地裁から届いております。7・28の10AM・709号法廷です。前回の第3回公判は7・14だったのですが、ここに入ってくるパンフ、機関紙等は全て7・17になっていましたし、知人から送られた弁護士の方もそう思ってくれました。どうせ欠席裁判だからいいようなものの、傍聴の関係もあるだろうし、今後、誤りのないように願います。

先日の弁護士の方の話し、は統一救対の会議が開かれ〝6派〟と革マルフロント、全共闘との間に少しく違いがあるとのことでした私は統一公判貫徹の方針を指示しますが、一方、方針の提起のみで終らず、我々にも討論参加の機会を与え、また、動揺している部分があれば、積極的にオルグし組織活動を強化することを望んでいます。また、地裁側の動揺、分離も注視し、きめ細く対応し、利用することも忘れないよう。

アッピール

今、私の手元には第4回公判の召喚状が地裁から届いている。7月14日に強行された第3回欠席裁判がどの程度まで進められたかまだ私には分らないが、例のごとくであったろうと想像できる。今や我等の幻の「裁判官」は黒い法衣をまとったブルジョア政治家となり下っている。三権分立、裁判の「中立」は単にブルジョア支配体制の分業であることは日々暴露されつつあるし、そしてこの幻想の崩壊は彼らの支配体制の崩壊への一歩でもあるのだ。もう既に遠くから地ひびきしている。70年安保闘争、70年代階級闘争に対し日帝弾圧対策を練っているブルジョアどもは幻の裁判官にも、もうとんな言葉はやめて、俺達の裁判に戻ってこい、と呼びかけている。柵と法廷に囲まれ、黒い法衣を着せられ、ちょっと高いところに座った、この素人政治家はヒットラー気取りで彼の灰色の突撃隊ライコールを指揮して殴りがっている。

しかし我々は、このにわか政治家に軍事裁判は両刃の剣であることを思い知らせてやらねばならない。この政治家共は、時に手紙作戦をとり、刑務所を見物し、対話の精神のデマゴギーを流し、時には長期勾留、機動隊による恫喝という硬軟両面の策を弄している。だが我々はこの術策を逆にとり、大衆の前に暴露し、大衆の怒りを組織し、その力をもって彼等をしめつけるであろう。彼らの弾圧は我等の闘いの導火線である。スプリング・ボードである。彼等は現代、方針を変えつつあるように見える。保釈によって出廷拒否の闘いを粉砕しようとしても、それは一面では彼らの長期勾留という弾圧方針の崩壊でもあり、我々はそれに対応し新たな戦術で対応できるし、統一公判の戦略も貫徹できる。

我々の闘いは出廷拒否の獄中闘争のみではないことを7・20の闘争は示すであろう。7・20は彼当同、弁護団、救対のみか、大衆と深く結合した闘争として地裁に対する巨大な鉄槌となるであろう

我々は同志諸君にこのアッピールを送るとともに、裁判官には何度目かの抗議文を再々度送った。

我々は我々独自の闘争で諸君に独房から連帯する。

我々の合言葉は分離公判粉砕、軍事法廷弾圧、統一公判貫徹である。共に闘おう。

大学立法粉砕！全国学園闘争を更に深化せよ！全国全共闘結成へバク進せよ！

11月佐藤訪米阻止！

安保粉砕、沖縄闘争勝利！

THE SEN-KI

（英文）No.4 （6月25日発行）
オフセット印刷

■4・28沖縄闘争の総括
■6・15安保闘争宣言
定価 70円（〒共）
マスコミ、諸団体は 3部 500円（〒共）
■外国の同志、友人と闘争情報を交換しよう！
■外国への手紙に THE SEN-KI を同封しよう！
■学園・職場に世界革命研究会をつくろう！

共産同国際部発行

共産主義者同盟労対部パンフレット

反帝統一戦線と階級的労働運動

第一章 労働運動の転換とは何か
第二章 70年安保闘争における組織された暴力の位置
第三章 反レ・パ闘争の階級的意義について
第四章 右派労働運動の性格と動向

発売中 一五〇円（〒五〇円）

共闘全国大会関東ブロック機関紙

進撃

第10号 （最新号）
一部20円（〒15円）
戦旗社でも取扱います